

# 白藍塾オリジナル

## 2019入試小論文分析&解答のヒント

2019年4月発行

白藍塾の入試小論文分析は、他の予備校と違って、その問題に対して受験生がどのようにアプローチすればよいのかを具体的に説明している。そのため、この分析を参考にすれば、誰でも合格レベルの答案を書けるはずだ。該当の大学・学部の志望者は、ぜひ、これを読んで、自分で実際に答案を書いてみてほしい。

執筆・大原理志

### ● 慶応・文学部

出題形式は、300～360字の要約問題と320～400字の小論文で、例年と同じ。課題文は能力主義に関する社会学的な分析を主題にしていて、ここ数年続いた文化・思想・言語などに関わる問題とはやや毛色が異なっている。ただ、議論そのものは「能力とは社会的に構成されたもの」というポストモダン的な内容になっていて、その意味では文学部らしい問題だ。

課題文はかなり入り組んでいる。簡単に課題文をまとめると、こうなる。

「全体としてメリトクラシー（能力主義）が進展しているかどうかについては、基準の置き方によるので、リアリティを欠いた議論である。能力を評価する基準は基本的に文脈依属的であり、文脈こそが我々がイメージする能力そのものを構成する重要な要素である。アメリカの社会学者ローゼンバウムはトーナメントモデルを提示している。企業内での昇進過程でいったん遅れを取ると競争から除かれて、勝ち残った人が次の昇進競争を行う。そこで敗れた場合、その人物の能力をそこまで定義づけるメカニズムを持っている。このように、トーナメントになっているために、能力の定義が事後的に作り出されてしまう。このメカニズムは日本の学歴主義に当てはまる。いったん学歴獲得競争で勝ち上がったものに対して能力の下限を定義し、その後の就職活動や昇進競争で実際の実力以上の過剰な能力評価が与えられる。日本において学力が能力の指標として利得増幅を促すには、できるだけ全員が参加するのが望ましい。そして、科学実験のように平等に実施される。このように、能力が社会的に構成されるという見方をすると、能力と社会との関係が見えてくる。コミュニケーション能力についても、社会がそのように社会的に定義しているとみるべきだ」

この文章が問題にしているのは、「能力主義」というときの「能力」はどうやって決まるのかということだ。「能力」というはっきりした基準があって、それによって評価されるわけではないという。トーナメントのような勝ち抜き形式になっており、そこで勝ち抜いた人に「能力がある」というお墨付きが与えられることになる。その典型として日本の学歴主義がある。高い学歴を得たものが、実際にはどうあれ「能力がある」とみなされて、その後、その人たちの中で競争が行われることになる。このように、「能力」というものは、もともとの潜在的な力ではなく、通過点の成績で作られるものだというわけだ。

ただし、それが多くの人々が納得できるものであるために、日本の試験は平等を重視し、まるで科学の実験のようにみんなが同じ条件で受けられるようになっている。そうであるから、多くの人々が学歴によってその人の「能力」の有無を評価することが説得力を持ち、それが「能力」として通用するという仕組みができています。

今、コミュニケーション能力が問題にされているが、社会がコミュニケーション能力が大事だと認識して、その定義をしようとし始めたと考えられるべきだという。

この文章は、「なんらかの能力の基準があって、それによって能力を評価する能力主義が存在する」という常識に反対して、「日本では、学歴というトーナメント方式の競争があり、そこで能力が定義づけられる」と主張している。

この文章をもう少しわかりやすくして、字数に合わせてまとめると、設問Ⅰの解答になるだろう。

設問Ⅱでは、「能力」についての「あなたの考え」を課題文を踏まえたうえで述べるのが求められている。課題文では、日本社会は学歴によってその人の能力が定められる社会になっていることが語られているので、正攻法は、「能力は学歴で定義づけられるものでよいのか」について論じることだ。

学歴によって能力を定義づけることに賛成の場合には、「一定の条件で学力試験を受けることによって、客観的な形で人に納得できるように能力を示すことができる。これを一つの能力をみなすことによって合理的に人材選びなどができる」、反対の場合には、「能力は状況によって現れ方が異なる。特定の仕事をする時に能力を発揮できるかどうかは能力であって、客観的、一般的な能力は存在するとみなすべきではない」「一定の条件での科学実験のような学力試験で能力を測ることはできない。そこでわかるのは、学科という特殊な分野での特殊な能力でしかない。それを能力とみなすことはできない」「現在の学科試験は過去のアカデミズムによるものであって、これからの社会に必要な能力を見るためのものではない」「能力は基本的に潜在能力である。学歴によってはそれを測ることができない」などの論が可能だろう。

©執筆者の許可なく本紙の全部もしくは一部を無断転載、無断複写することを固く禁じます。

発行・白藍塾総合情報室 (03-3369-1179) <https://www.hakuranjuku.co.jp>